

高知大学農林海洋科学部・農学部
Faculty of Agriculture and Marine Science Kochi University

vol.
44

December
2022

後援会だより



ご挨拶



農林海洋科学部・農学部
後援会長

なが おか しん じ
長岡 辰治

本年度より高知大学農林海洋科学部・農学部後援会の会長を務めさせていただいております長岡辰治と申します。日頃より、後援会の皆様におかれましては、本会の活動にご理解・ご協力を賜り、誠にありがとうございます。会長として大変不慣れではございますが、後援会役員と事務局の方々々と力を合わせて、微力ながら精一杯務めさせていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

さて、本年度においても、新型コロナウイルス感染症の拡大による「第7波」の影響で後援会活動も行事の中止や事業の縮小などが余儀なくされました。また、後援会総会や保護者会なども開催することができず、総会では書面での決議となり、皆様には大変なご負担とご迷惑をおかけしております。現在は昨年度の秋と同様、感染状況は少し落ち着いているところですが、年末年始はすでに「第8波」が予測されるなか、今後の本会の活動につきましてもなかなか見通しが見えないのが現状でございます。

そのようなコロナ禍ではありますが、後援会では、お子様が充実した大学生活を送ることができるよう、文化生活面の環境支援や就職活動支援などへの援助をできる限り行い、学生の皆さんが少しでも学業やサークル活動など、充実した時間を過ごせるよう、支援できればと考えています。そのためには、会員の皆様のご支援・ご理解が必要不可欠でございます。今後とも、ご理解・ご協力を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

最後に、会員の皆様とご家族の皆様方のご健勝とご多幸を祈念いたしまして、ご挨拶とさせていただきます。

学生への支援

課外活動、就職活動などを支援し、また、卒業記念品贈呈や卒業生祝賀会を行います。(コロナ禍の影響により中止や変更されているものがあります)



課外活動支援

- 体育施設維持整備 (暗幕カーテンリニューアル)
- スポーツ用品 (ラケット・ボール・シャトルなど)



卒業記念

- 記念写真 ● 記念品
- 証書ホルダー ● 祝賀会



就職活動支援

- 就職関係誌購入
- 就職活動ガイドブック作成
- 面接対策特訓セミナー講師謝金



その他

- 日章寮役員と学部長等の懇談会 (昼食弁当支弁)

学生表彰

- 記念品

保健衛生

- 消毒エタノール等

事業運営

後援会事業などの運営に関することは、主に「役員会」、「総会」において計画・執行され、活動内容は「保護者会」や「後援会だより」において情報発信をしています。

後援会だより発行【年1回】





農林海洋科学部長
えだ しげ けい すけ
枝重 圭祐

農林海洋科学部・農学部後援会の皆様には、日頃より、学部・専攻の教育運営に多大なご協力とご支援を賜り、心より御礼申し上げます。

さて、一昨年から始まりました新型コロナウイルスの感染拡大につきましては、今年の春先は感染者数が減ったこともあり、昨年度の卒業式・修了式と今年度の入学式のいずれも十分感染対策をとった上で挙行することができました。また、一学期の多くの授業も対面で行うことができました。しかしながら、夏季に入ってからオミクロン株が全国的に流行し、高知大学の活動指針における制限レベルを上げざるを得なくなりました。その結果、学生らしい生活が十分にできない状態となり、学生に対して申し訳なく思っております。

幸い、9月に入りまして全国的に感染者数が減少傾向となり、高知県のコロナウイルス感染対応の目安のステージが下げられたことから、9月28日に更新された「新型コロナウイルス感染拡大防止のための高知大学の活動指針」に従い、十分なコロナ対策のもと、多くの授業を対面で行っております。少しでも早く、ご子息・ご息女が完全に平常の学生生活を送ることができるよう心より願っております。

しかしながら、全国的にはまだ相当数の感染者が発生していることから、ご好評いただいている保護者会と同日開催予定の物部キャンパス一日公開については今年も中止とさせていただくことになりました。後援者の皆様にはご迷惑・ご心配をおかけして誠に心苦しく思っております。来年こそは開催できるよう心より願っております。

今後とも何卒ご理解、ご協力を賜りますようよろしくお願い致します。

-追伸-

経年による損傷が著しいことから利用に支障のあった物部キャンパス体育館の暗幕カーテンが、11月、後援会のご厚意により更新されました。学生の教育・レクリエーション活動への大きなご支援に感謝申し上げます。

表彰 TOPIC

IUPAC物理有機化学国際会議 ポスター受賞

農林海洋科学専攻1年 まさもと うらら
昌本 麗



環境に優しい有機合成法の実験を提案しました

中学生の時から生物が好きで、特に興味があったのは細胞です。好きなことを社会で活かしたいと、農林海洋科学部に進学しました。大学で学ぶうちに、興味の対象が生物から化学へと移り、いまは大学院で有機量子化学の研究に取り組んでいます。

研究テーマは、医薬品の原料になる環状スルフィド。2022年7月に広島で開催されたIUPAC物理有機化学国際会議で、環境に配慮した合成法に関するポスター発表をしました。有機化学の実験では通常、有機溶媒を使うのですが、この研究では環境に負荷をかけない水を使用したところがポイントです。会場では多くの研究者から質問を受け、海外の方には英語で対応しました。望外なことに、この発表でポスター賞を受賞することができました。両親に伝えると、驚くとともに、とても誇りに思ってもらえたようです。将来は化学系の企業に就職し、研究を通して社会に貢献したいと考えています。



活動 TOPIC

ウミガメサークル 「かめイズム」部長

海洋資源科学科3年 まつもと すず か
松本 涼楓



産卵に訪れるウミガメの調査をしています

海洋生物生産学コースで、産業の観点から水産物について学んでいます。サークルはウミガメの調査、研究を行う「かめイズム」に所属しており、今年、部長に指名されました。

サークルでは5月から8月にかけて週1回、高知県東部の琴ヶ浜で産卵上陸調査を行っています。産卵に適した場所を探しながらぐねぐね歩いた跡を見ると感動しますよ。調べたことは日本ウミガメ会議や土佐生物学会などで発表します。去年は流木などの漂着物を被せたときの砂中温度がテーマ。ウミガメは砂中温度が35℃以上になると孵化率が大幅に下がるんです。調べた結果、被土率を100%にすると最も温度が低くなり、孵化率は上がることがわかりました。ほかには子どもたちへのウミガメに関する知識の普及活動や、室戸沖の深海魚漁への同行、年1回の学生ウミガメ会議への参加などを行っています。「かめイズム」に入会し、学生生活がとても充実して楽しいですね。



1. 学んだ水資源工学の知識をそのまま活かせる会社に就職

就職先／株式会社三祐コンサルタンツ

農林資源環境科学科 4年 **渡邊 莊介**



自然豊かなフィールドに憧れて高知へ

渡邊莊介さんは東京都渋谷区の生まれ。大都会で育つなか、逆に自然豊かな地域に憧れるようになり、小学校を卒業後、沖縄県の離島の中学校に山村留学をしたそうです。「高知大学を志望したのも、沖縄に行ったときと同じような思いから。生物や生態系に興味があったので、海、山、川がすべてそろい、自然に恵まれたフィールドが広がる高知県で学びたいと考えました」

2年生時に選択したコースは、ダムや水路といった水利施設の構造などを学ぶ生産環境管理学プログラム。人と自然をテーマにした人気バラエティ番組を



観て、魚が遡上するために必要な魚道の重要性を知ったのがきっかけだといいます。3年生のときに水資源工学研究室に入り、研究テーマをコアマモに決めました。浅い海や河口の底に生育する海草の一種で、群落は稚魚のゆりかごのような役目を果たしています。「アカメの稚魚の隠れ家にもなっているのですが、近年は高知県でも減少して問題になっています。研究の方法としては、まず高知市の浦戸湾沿岸の河川に出向き、目視で確認することからはじめます。見つけたら、生えているところと生えていないところの塩分濃度や水温、土壌

の環境の違いなどを調べます。フィールドで調査するのはとても楽しいですね」とこやかに語ってくれました。

両親と友人、学務室に支えられた就活

就職活動は3年生のときに手探りでスタート。「エントリーシートの書き方といった基本的なことを含めて、はじめは全然わからなかった」という渡邊さんが頼りにしたのが、学生の就活を支える学務室の存在でした。「エントリーシートの原稿は、何回も添削していただきました。客観的な視点からの確かなアドバイスをもらえて、本当にありがたかったですね」と就活序盤戦を振り返ります。

特に重点を置いて対策したのは面接。こう質問されたらこう返そうと、事前に15項目くらい考えて頭に入れたとのこと。なかでも「頑張ったこと」「挫折したこと」「挫折をどう乗り越えたか」を重視し、より時間をかけて回答を練ったそうです。「これほど練習したんだから、本番では絶対にうまくいくはず。こう思えるほどまで、友だち同士で見せ合いながら何度も練習し、学務室でも繰り返し見ていただき、実際の面接に臨みました」。ご両親の支えも大きな力になったとのこと。自己分析するに当たって、長所や短所についての意見を聞かせてもらいました。面接の前に連絡したとき、『莊介なら大丈夫だよ』と言われたことも自信につながりましたね」

学んできた水利施設の設計を仕事に

渡邊さんが就職を決めた会社は、農業や水資源開発などのコンサルタント業務を行う三祐コンサルタンツ。「水利構造物の設計が業務の大きな柱なので、生産環境管理学プログラムで学んだことがそのまま活かせます。暮らしを直接支える農業の手助けができることも、就職を希望した理由のひとつです。人の役に立つ仕事ができるということで、両親にもすごく喜んでもらえました」と渡邊さんはうれしそうに話します。

配属先はもう決定していて、水路やパイプラインの設計に携わる部署とのことです。畑に水を供給する水路をテーマに、農家を手助けすることが当面の目標。

「将来的には、水利施設に目がいくきっかけとなった魚道の問題を解決していけたら、という思いもあります」と胸を膨らませています。



両親からの言葉が
とても自信になりました

2. 「お菓子好き」が見事、スイーツも製造するメーカーへ

就職先／株式会社オイシス

農芸化学科 4年 石倉 帆夏



希望職種の就職に有利な研究室を選択

徳島県から高知大学に進学し、農芸化学科で学んでいる石倉帆夏さん。子どものころから大のお菓子好きで、「食べるだけではなくて、作るのも大好きなんです。うまくできなかったときには、次は少し作り方を変えてみようかと、工夫して改良するのも面白いですね」と顔をほころばせます。

石倉さんは3年生の後期から応用微生物学研究室に所属し、多忙な日々をおくっています。じつは、この研究室に入ったのも、お菓子好きが理由。自分はこういった仕事



をしたいのか？卒業後の進路をよく考えた結果、「好きなことをやりたい」という結論にたどり着きました。「2年生のころから、将来は食品関係の仕事をしたい、できればお菓子メーカーに就職したいという思いが強くなりました。そこで、食品に関する研究ができるこの研究室に入りました。研究テーマは糖の機能性。企業とミーティングを重ねながら共同研究も行うなど、貴重な経験をさせてもらっています」

研究室の先輩や同期がサポート

就職活動をはじめたのは、3年生の冬。大学が開催するセミナーに参加すると、本格的にはじめようという思いが湧いてきたそうです。目指したのは菓子メーカーと製パン業界で、20社ほどにエントリーシートを提出しました。

「就職活動を力強くサポートしてくれたのは研究室の仲間たちです。エントリーシートを書くときも、先輩からアドバイスをもらったり、同期でお互いに確認し合ったりして進めました。人から客観的に見てもらえたのはすごくありがたかったですね」と振り返ります。特に重要視したのは自己分析。「何かに誇れるようなエピソードを思い出すと、自分はこういう人間なのか、人よりも優れている部分は何か、といったことが浮かび上がってきました」と話します。就職活動に当たっては、後援会の費用で購入している『会社四季報』や、3年時に配布する就活ガイドブック『Ambition』も参考になったそうです。

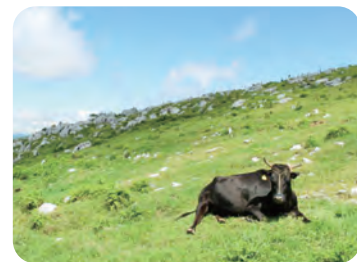
採用の大きな決め手となる面接は、事前に入念に準備して臨みました。原稿をある程度作っておいて、こういった質問にはこう答えようとシミュレーション。「実際の面接では、想定していた

質問が多かったので、80点くらいの答え方はできたのではないかと思います」と石倉さん。見事、大手の食品会社であるオイシスに就職が決まりました。

お菓子作りの経験を仕事で活かしたい！

オイシスの前身は近畿食品工業。ある年代以上の人には「近畿パン」という名でよく知られています。「就職が決まったよ、と祖父に報告すると、『ほう、近畿パンか、知ってるよ』と言ってくださいました。それがすごくうれしかったですね」とにっこり。オイシスはパンやスイーツ、麺類などを製造し、コンビニやスーパーマーケットなどに納入している会社。「配属先はまだわかりませんが、会社には開発職が希望だと伝えていきます。これまでのお菓子作りの経験を活かしたいですね」と目を輝かせます。

石倉さんはいま、卒論に向けた研究でとても忙しい一方、週末には高知のさまざまな場所に出かけて、趣味の写真撮影



を楽しんでいます。「モネの庭、各地の滝や溪谷など、自然系のきれいな場所を訪ねています。最後の学生生活ということで、高知を満喫しているところです」と笑顔で語ってくれました。



パンもよく作っています

内定をもらってからは

3. 日々の実験で培った根気は 絶対、仕事に活かせるはず

就職先／宮地電機株式会社

海洋資源科学科 4年 かわ ばた 川端 ひめか



研究、ダンス、狩猟と学生生活を満喫

川端ひめかさんは徳島県の内陸、阿波市の出身で、地元にはない海に興味があったそうです。大学では水辺の生物について学んでみたいと調べるうちに、目に留まったのが高知大学農林海洋科学部でした。高校3年生のとき、物部キャンパスで開かれたオープンキャンパスに参加。「研究室をいろいろ見学させてもらって、面白そうだな、ここで学びたいなと思ったところがありました。それがいま所属している海洋進化生態学の研究室です。研究対象とする生物の遺伝子がどのように分かれて進化してきたのか、どういう生態なのかなどを調べています」と川端さんは希望通りの学びを経験しています。研究テーマは貝の一種であるカワニナ。なかでも琵琶湖産

のカワニナを対象に、現地
でサンプリングしたものを研
究室に持ち帰り、実験を繰り
返して、DNAの構造などか
ら遺伝子を調べています。

学びに加えて、サークル
活動も積極的に参加。ひ

とつは高校生のときから熱中してきたダンスのサークルで、イベントや学園祭などで練習の成果を披露しています。もうひとつが狩猟サークルの「土佐の懸橋ハンプロ」。「山に罾を仕掛けて、イノシシ



やシカを捕獲し、さばいて食べるサークルです。こちらのサークルに関しては、見た目の印象と違うねとよく言われます」と笑います。

公務員志望から急きょ方向転換

川端さんは高知大学で学ぶうちに、「高知には優しくて、人当たりの柔らかい人が多いので、ずっとここで暮らしていきたい」と思うようになりました。就職活動は当初、公務員一本。しかし、4年生の6月に受けた公務員試験に落ちてしまいました。「えっ、どうしよう……と。民間企業を志望している同期の多くは、もう内定をもらっているんですよ。どうしたらいいのかと、本当に焦りました」とショックを受けた当時のことを振り返ります。

困った川端さんが駆け込んだのが、就職活動をサポートする学務室でした。「公務員志望だったので、エントリーシートもほとんど書いたことがなかったんです。学生支援係の方に相談して、的確な書き方や面接の際の話し方などを練習しました。その甲斐あって、実際の面接ではしっかり答えられたと思います。学務室には本当にお世話になりました」と、急きょ方向転換した就職活動を乗り切ることができました。

デザイン系の部署で働きたい

卒業後、川端さんが働くのは、高知市に本社のある宮地電機。「学務室から紹介され、説明会に参加したところ、とても魅力的な会社だと感じました。社員の方がすごく親切で、ここなら頑張って働けそうだと思ったんです」と川端さんは明かします。ご両親は当初、徳島に帰ってきたらどう、と話していたとか。しかし、川端さんが会社の温かい雰囲気を伝えると安心し、就職が決まったことを喜んでくれたそうです。

会社の業種のなかで、川端さんが興味を持っているのはインテリアデザイン。「資格取得に向けた講座を受ける場合、会社が費用を半額ほど負担してくれるんです。入社後はデザイン系の資格を取って、希望の部署に就きたいと考えています。大学で学んだことは違いますが、実験で培った根気や体力、プログラミングの知識などは活かせるはず。働くのがとても楽しみです」と、春の社会人スタートを待ち遠しく感じています。



学務室にサポートいただき
本当に助かりました

4. 希望する勤務地は「全世界」! 理系の院新卒が商社営業職へ

就職先／フルサト工業株式会社

農林海洋科学専攻 2年 て し がわら りょう た 勅使川原 峻太



注目のマイクロプラスチックを研究

農林海洋科学部には「魚や海が好き」という理由で入学する学生が多いなか、勅使川原峻太さんの志望動機は少々変わっています。「大学受験の際に最も考慮したのは、世界ではこれから何がいちばん力を持つのか、多くのお金を生み出すのか、という点でした。当時、SDGsの考え方が浸透しはじめたこともあって、食料問題が大きなテーマになっていくと考え、農林海洋科学部を志望しました。魚が好きというのではなく、魚に関する生産を学ぼうと思ったんです」。こうして海のない長野県から、海がすぐ目の前にある物部キャンパスへとやって来ました。

大学で学ぶうちに、国内外で大きな問題になっているマイクロプラスチックに興味を持った勅使川原さん。「学部生時代は、研究の上澄みだけを見ていたような感じ」がしたこと



から、大学院でもっと研究したいという思いが湧いてきたそうです。そのとき、勅使川原さんが取った行動がユニーク。「大学院進学にはどういうメリットがあるのか、両親にしっかりプレゼンテーションしました。無事、理解してもらえて、引き続きサポートしてもらえることになりました」と話します。大学院では河川の表層水に含まれているマイクロプラスチックの濃度を計測。採水器や抽出方法を改良し、より細かいマイクロプラスチックの回収を目指す研究をしてきました。

「営業職が似合う」と自覚して就活へ

学部生のときには、まったく就職活動をしなかった勅使川原さん。大学院生になって、はじめてエントリーシートを書きました。「まわりの仲間には研究職志望が多かったのですが、ぼくは営業職が似合うと言われることが多く、自分でもそう思っていました。親族に商社マンがいて、商社はいいぞという話もよく聞かされていたので、商社の営業職を志望しました」と理系の大学院生としては一風変わっている方向に舵を切りました。

はじめて経験する就職活動は、「自分の中を深く掘っていくような作業」だったと振り返ります。選んだ就職先は、鉄骨建築用資材などを扱う商社であるフルサト工業。「人事の方ととても気が合って、面接中にいきなり『君は合格だよ』と言われたんです。めったにないことだそうです」と評価してくれた人事担当者との出会いを笑顔で語ります。

会社選びの大きな理由は海外進出

希望する勤務地を会社に聞かれ、勅使川原さんが返した答えは何と「全世界」。将来は海外へ、と強く思うようになったのは学部1年生のときでした。タイやベトナムな



どをバックパッカーとして1か月余り放浪し、日本にはない自由な空気に大きな魅力を感じたといいます。いずれは東南アジアの大学に留学し、そこでマイクロプラスチックに関する論文を書きたいという思いも湧いたとか。しかし、新型コロナウイルス感染症のパンデミックによって断念せざるを得なくなりました。とはいえ、海外雄飛への思いが薄れたわけではありません。

「じつは、ぼくは日本が合っている気がなくて、東南アジアなどの海外が向いているのではないかと考えています。フルサト工業を志望したのも、海外に進出しているのが大きな理由です。入社後、海外に赴任できるように頑張ろうと思います」と真っ直ぐな視線で抱負を語ってくれました。





1. 新しい菌や寄生虫に興味津々 大学院で追求します！

海洋資源科学科 4年 **川原 実結**

小さなころから、魚を見るのも食べるのも捕るのも好きでした。大学でも魚の研究をしたいと、海洋資源科学科のある高知大学を志望しました。高知に来てからは釣りに行ったり、夜の漁港で魚をすくったりするなど、とても楽しんでます。

3年生になって研究室を決める際、大好きな魚を扱いつつ、大学ならではの設備や薬品を使った実験もやってみたく、魚の病気を対象とする研究室に入りました。研究テーマはアユの冷水病。細菌性の感染症で、流行するとアユが大量に死ぬこともある厄介な病気です。研究では四万十川中流をフィールドに、現地で捕れたアユを解剖してPCR検査にかけ、陰性か陽性か、原因となる菌をどれほど持っているのかなどを調べます。漁期が終わったら、蓄積したデータをグラフにして、今シーズンの状況を流域の町や漁協などに報告するという流れです。日本魚病学会で発表も行いました。準備するのがすごく大変でしたが、いい経験をさせてもらいました。



研究に取り組むうちに、4年生で終わるのはもったいない、大学院に進みたいと思うようになりました。じつは研究室に入って間もなく、四万十川のアユから、日本では報告されていない新しい菌が見つかったんです。そのとき、ああ研究って面白いな、もっと調べたいなという思いが湧き上がってきました。また今年の夏、これも日本ではほとんど研究が進んでいない寄生虫が、四万十川のアユの肝臓にいることがわかりました。何からアユに寄生したのか、成虫となるときの終宿主は何なのかなど、わからないことだらけ。こちらのテーマも非常に面白そうです。ただ、とりあえず、いまは卒論に全力で集中します！



2. 魚由来の食中毒の研究に没頭し、 修了後は「全漁連」に就職

農林海洋科学専攻 2年 **安宅 太一**

サンゴが生息する亜熱帯の海もあれば、岩礁からなる温帯の海もある。そんな高知の海にすごく魅力を感じて、高知大学に進学しました。兵庫県出身なんですが、高知の海は瀬戸内海とは全然違う。生き物もまったく異なるので、フィールドワークも海遊びも本当に楽しいですね。

大学院に進学したのは、研究をもっと続けたいと思ったのが理由です。卒論だけだと、研究に携われるのは半年程度なので、物足りなく感じました。両親には、学費を半分出すから進学させてほしいと相談しました。アパレルのお店でバイトをして、お金をそれなりに貯めていたので、その貯金でまかっています。研究対象は、学部生のときからのテーマであるシガテラ中毒。サンゴ礁に生息する魚を食べて、消化器系や感覚神経に異常をきたす食中毒です。原因毒を作るプランクトンが海藻に付着し、魚がその海藻を食べることによって体内に蓄積し、毒を持つようになると考えられています。現地でサンプリングしたり、送ってもらったりした



海藻をもとに、研究室でプランクトンを培養し、毒性や増殖する条件などを調べています。大学院1年生のときには、国際有害有毒藻類学会でポスター発表をして、「最優秀学生プレゼンテーション賞」を受賞することができました。

修了後は全国漁業協同組合連合会(全漁連)に就職します。利益を出すのではなく、水産業を支えるのが目的というところに強くひかれました。全漁連では魚食普及に向けたPR活動や水産物の商品開発、漁業者に向けての重油販売などを行っています。配属先はまだわかりませんが、幼いころから好きだった魚にかかわる仕事に取り組み、人の役に立ちたいと考えています。



高知大学学章 (シンボルマーク)

未来へ向かって飛躍し、希望に満ちた新生「高知大学」のイニシャル「K」をモチーフに、青色で太平洋の波清と黒潮を、空色で若者の可能性と大空とをそれぞれイメージし配色。躍動感あふれた新生「高知大学」を表しています。